



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	カミュとサルトルの「無神論」とイエス・キリスト
Author(s)	小林, 敬
Citation	基督教学, 29, 21-24
Issue Date	1994-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46542
Type	journal article
File Information	29_21-24.pdf



カミュとサルトルの

「無神論」とイエス・キリスト

小林 敬

カミュとサルトルの思想は、サルトルのいう「無神論的実存主義者」なるタイトルともあいまって、キエルケゴールの系譜に属する「キリスト教的実存主義者」に対しての、ニーチェの系譜に属する流れとして位置付けられる事が一般的である。だが両者の著述の中身に立ち入って検討してみると、同じく「神」なるものを否定する思想とはいえ、その否定の仕方において、一方でのニーチェにおけるいわゆる「神の死」の思想、即ちキリスト教的な文脈における神の理解を前提とした上でのその否定という仕方とは、根本的に異質なものが見受けられよう。筆者は元来、この両者とは逆に信仰者の立場に立つG・マルセルの思想主に眺めてきたものだが、関連し

て同時代における逆の立場の思想としてこの両者の「神」否定の思想についても、近年検討し公表してきた⁽²⁾。今回の発表はかかる成果の回顧を中心にして、同時にここから発表時現在準備中のマルセルの回心についての検討⁽³⁾への展望に関連づけてゆきたく思う。かかる爾来の総括と今後の展望を結ぶ過程の整理が、公表済の内容の再議を含む内容をあえてここで提起した所以である。

特に中期以降のカミュが描いた「神」の像は、人間の運命をほしのままに操りこれにいわれない苦難を負わせるいわば「暴君」(tyran)の像という事ができよう。言い換えれば、彼は彼にとって本来存在しないはずの神なる何者かを、それに対しての反抗の対象としてその思想および文芸創作の内に要請している、という逆説を背負っているというる。前期の『シーシュポスの神話』や小説『異邦人』でも、「神」は人間の不条理(absurdité)の自覚を妨げるものとして反抗すべき対象ではあったが、無視出来ないほどに彼の敵となるまでの位置は占めるには到っていない⁽⁴⁾。ここでは、神という不条理な觀念に逃げる事を排して人間自身の不条理性に直面する事が訴えられているが、なぜ人間という不条理なものが肯定

されるのに、神という不条理なものは否定されるべきなのかの説明はない。

中期の『ペスト』に到って彼が「神」に反抗する所以は明確化してくる。ペストの流行という、いわれなき不幸の中で戦う人々の群像をめぐるこの作中において、カミュはペストと「神」を同一視して描き、「神との戦いによる人間の生の確立」を表現する。ここで神は「暴君」としての性格をはっきりと現している。例えばこの作品中である司祭が当初ペストの流行を人の罪への神の懲罰とする説教をなすが、その後少なくともまだ汚れを知らぬ幼児がペストで悶死する情景に立ち合ったこの司祭と主人公の医師の問答にこの神の「暴君」観が明らかに見られ得る。まさに旧約ヨブ以来の神義論のテーマの彼自身それと知らぬままでの独自の掘り下げといえよう。では彼は、これに対して、全く違った神の像、即ち歴史的にキリスト教会が伝えてきた十字架のキリストを、どう捕らえているか。彼にとっては十字架は「神の子の受難による贖罪」ではなく、全く「暴君たる神による人間イエスの虐殺」なのである。彼の無神論は、ニーチェのようなキリスト教信条を知った上での否定という

より、それを元来「知らない」ゆえの否定というべきである。なお、晩年の『追放と王国』においてはやや変化もあるものの、新たな方向性が明らかになる以前に彼は没し、この変化は未完のままだったという。これについてはここでは立ち入らない。

カミュがキリスト教の神を「知らない」ながらも、反抗の対象として逆説的に「神」なる何かを求めていたのに対して、「神などいようがないが全く同じ事だ」という完全な神への「無関心」の立場を取ったのがサルトルといえよう。ニーチェの思想が人格神との対決に発したのに対して、『存在と無』では完全に形而上学的な神概念に集中し、それが即自 (en soi) かつ対自 (pour soi) たるがゆえに世界の中に実現不能であるとその不毛を説くのである。ではなぜかかる神についてあえて語る必要があったのか。それはこれが人間の投企 (projet) の目標だからである。だがそれは、それによって人間たる事を損なわれめられる一つの無益な受難 (une passion inutile) に帰する。

この「概念としての神」の不毛性とその概念を人間の投企の目標に帰する背景には、自伝 *Les mots* にあるよ

うに、彼の家庭がそもそも宗教的無関心のもとにあった事が語られている。彼の無関心の根源は、まさにキエルケゴールのいう所の、「キリスト者の内なる異教」に起因するといえよう。彼にとっては、その祖父を継いで、「宗教の代用品」としての文筆による「創作 creation」が置かれ、いわばここに「自分で自分を創造する」神たらんとする思想の根源も伺える。サルトルの「神」は、むしろ人間さらには自己に他ならない。彼のキリスト教の「神」に対する態度はその点で、アンチキリストではなく、ちょうど我々の日本の土壌におけるキリスト教の一般的イメージの如く、自分とは全く関係ない事柄にすぎなかったといえる。

以上両者は、それぞれキリスト教否定の立場に立つとはいえ、ともにそこには「イエス・キリスト」が欠如している。ただカミュでは、これをたまたま知らなかったままで、しかし神への反抗というマイナスの神義論という形で、神との関わりの可能性を残しているのに対して、サルトルは予めその可能性をすべて排除し、むしろ自己神化の方向にむかっている。この両者の違いに関して、前者には対話の可能性を認め、後者にはその可能性の余

地がない事を指摘したのがガブリエル・マルセルであった。マルセルの態度に不寛容を見出だすサルトル研究家もいるが、もしそうだとすれば、カミュへの好意的反応は説明がつくまい。この態度は、彼自身が回心者だった事、つまり当初はカミュやサルトルと同様にキリスト教自体と全く接触しない土壌から出発しながら、後に回心したものである事、いわばカミュが知るに到らずサルトルが知るべき必要すら認めなかった、イエスにおいて受肉した神との出会いを経験したものである事を、念頭におく要があろう。例えばマルセルの回心数年後の著作『存在と所有』の中で無神論についての考察を見れば、彼は直接イエス・キリストの神の弁証論はあえて行なわず、回心以前の彼自身と同様な者としての「無神論」者との対話を念頭に置いており、この中で信仰への無関心には全く対話の条件が欠けているものと見るが、むしろ積極的に信仰を拒絶する者には、そもそも信仰即ち神の呼び掛けへの応答は応答か拒絶かを選択し得る自由意志を伴った存在としての人間にしか可能でない事から、対話の逆説的な可能性を見る。マルセルがカミュに親近感を持ちサルトルにはそうでなかった所以はここに伺えよ

う。尚マルセルの回心に関しては、稿を改めて検討したい。

カミュとサルトルが否定した所の「キリスト教」は、ともにイエス・キリストを欠いた「キリスト教」であったが、前者にはキリストを知らずして組み立てた「神」の像への積極的反抗のゆえに、逆説的ながらキリストの受肉が問われ得る余地が残るといえ、ここに信仰者との対話の可能性も求められうるのに対して、「キリストなきキリスト者」の養育を継いで自己神化の方向に向かった後者には、受肉したキリストが語られうる余地がなく、前者におけるような対話可能性もない。この点で「キリストなきキリスト教」はキリスト者の信仰にとってだけの問題ではなく、キリスト者と非キリスト者の対話の地平においても問われるべき問題である事がここでも改めて確認されよう。

註

- (1) F. Nietzsche: *Also sprach Zarathustra*; Teil 2, 《Von den Mitleidigen》
- (2) 1) カミュの「*Le mythe de Sisyphe*」= Cf. 拙論：『「キリスト」もしくは「暴

君」としての神「アルベール・カミュのキリスト教理解（又は無理解）」、『大阪女学院短期大学紀要』第二一号所収、一九九一年二月発行。／2) サルトルについて＝ Cf. 拙論：『ジャン・ポール・サルトルにおける「拒まれた神」』、『八代学院大学紀要』第四一号所収、一九九二年一月発行。

- (3) マルセルの回心をめぐる検討については、本発表時現在一九九三年九月の日本宗教学会・第五二回学術大会（於、北海道大学）にて発表予定。（その後同会にて発表済。より詳細には次の論文として掲載。『「ためらい」から「応答」へーガブリエル・マルセルの回心の意味するもの』、『哲学研究年報』第二七輯（野田欣孝教授退任記念号）所収、関西学院大学文学部哲学研究室編集、一九九三年十二月発行。

- (4) A. Camus: *Le mythe de Sisyphe*; 《L'homme absurde》
- (5) Camus: *La peste*; Chap. IV
- (6) J.-P. Sartre: *L'Être et le néant*; Gallimard, 1943; pp. 707-708.
- (7) Sartre: *Les mots*, Édition-folio, Gallimard, 1964; pp. 208-209.
- (8) Gabriel Marcel: *Être et avoir*, Aubier, 1935; p. 299.
- (9) Ibid.; p. 310.